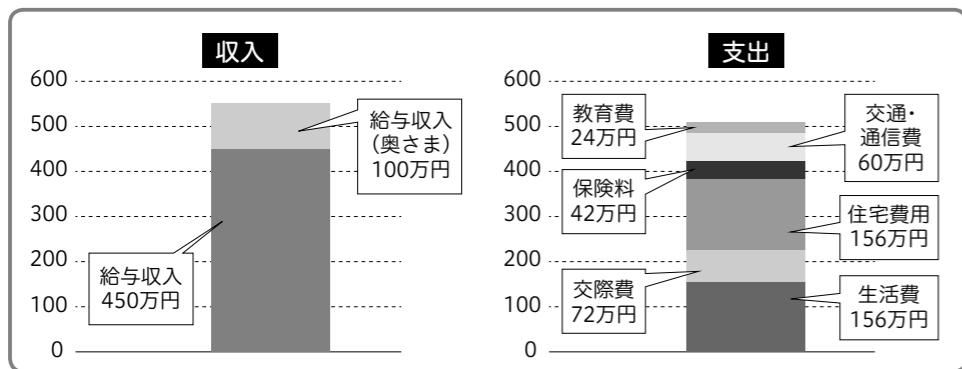


キャッシュフロー表を活用した オーダーメイドの提案は こう行う

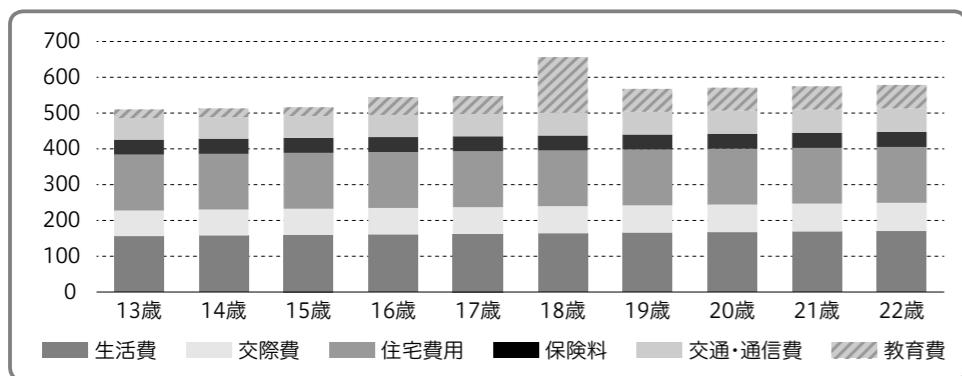
杉山 明
バームスコーパーレーション有限公司
取締役社長 CFP®

本当の意味で「顧客本位」の提案を行うためには
キャッシュフロー分析が欠かせない。
本稿では、キャッシュフロー分析による
オーダーメイドの提案の手順やポイントを解説する。

図表1 近代家の収入と支出



図表2 今後10年間の支出見積り



近

代家はご主人の太郎さん(45歳)、奥さまの恭子さん(48歳)、一人息子の健君(13歳・中学1年)の3人家族である。恭子さんは、近くのスーパーでパートとして働いている。昨年導入されたパート勤務者に対する社会保険の適用拡大(いわゆる106万円の壁)の影響で、2017年からはパート収入は年間100万円になると見込まれている。

大学の入学金等があるため教育費の変動が最も大きい

「近代家の家計は、このままで大丈夫なのか」という点について、キャッシュフロー(CF)表を使いながら分析を進めてみたい。

現状を把握する

図表1は近代家の収入と支出をまとめたものである。CF表の初年度の収入と支出をグラフ化したものと考えるとよい。

んパート収入は、いわゆる「106万円の壁」の問題で減少して100万円。一方の支出は、生活費と住宅費用はともに156万円(月額13万円)、次いで、交際費と交通・通信費が72万円、60万円と続く。収入と支出を比べてみた結果、初年度の収支は、40万円程度の赤字となっている。

後で見直しを行う費目は単独の項目にしておく

CF表を作成する

これらの情報をまとめて作成したCF表が、図表3である。このCF表は縦軸が時間軸になっており、横軸が収支の内訳になっている。一般的なCF表は横軸が時間軸になっているが、それを縦軸にしてもまったく問題はない。

CF表の項目をみてもらうと、給与収入はご主人と奥さまで分かれている。また、交通・通信費や保険料も個別の項目として設定されている。CF表に表示する項目を、どのような分類にするのかは分析するFP側に委ねられている。筆者の場合、後で修正を加えることになりそうな項目はできるだけ単独の項目にしておくようにしている。ここでは、収入3つ、支出7つの項目に分類している。

シニア期スタートまでの家計をCF表で分析する

考察の焦点とCF表の期間

ところで、このCF表は20年分しか作成されていない。「もつと長期間にわたった分析が必要になるのでは？」という疑問がわいてくるかもしれない。より長期のCF表の作成も可能であるが、そもそも、CF表を作成する理由をもう一度考えてほしい。

今回の分析の焦点が「近代家の家計は、このままで大丈夫なのか」にあることを考えると、それほど長い期間のCF表が必要とされるわけではない。ここでは図表5のように考えて、CF表の期間を20年とした。45歳の20年後は65歳であり、シニアライフの始まりの時期と考えることができる。このタイミングをマイルストーン(一里塚)と考え、それまでの生活に焦

点をあてようとしたわけである。

一方、図表4で確認できるように、60歳時に大きな収入(退職金の受取り)があり、61歳時に300万円と大きな支出があることがわかる。この金額は、老後のための生活資金である。

つまり、老後の必要生活費を3000万円とし、それを61歳時に一括で支出すると仮定したときに最終的な資産がプラスになるのであれば「近代家の家計は、このままで大丈夫」という結論になり、マイナスが発生するようだと老後資金の積立が足りていないことを意味している。

図表4の61歳以降の部分を見るとマイナスになっている。つまり、老後のための必要資金を準備できていないため、家計の改善が必要ということになる。

資産運用を行うだけでは家計の改善はできない

改善策 資産運用